

に至つて、掃部の嫡流門太郎家の外に、新たに森の知行を召し上げて、掃部の姪上林又兵衛(又市の子)の家を引き立つるに至り、宇治は三百年、上林兩家の支配の下に御茶師なる特別階級をつくるに至れる也。

之に依りて之を見れば、宇治に茶を産する既に元亨にあり、尺素往來の當時朝日の名既に人口に膾炙して、梶尾の深瀬を凌駕せるを見れば、東山殿の時代に於てまづ川の北岸に將軍家近來の賞翫物を産し、やがて川の南にうつりて、足利末期に折

居川附近の洪積丘陵地に茶園を生じ、織田豊臣徳川の三代其後をうけて之を玉成せりと云ふべし。もしそれ上林の若森園、御茶師、御茶壺等の詳細に關しては筆者が將に刊行せんとする宇治誌に譲りて茲に之を省く、讀者の諒とせんことを乞ふ。

附言、さきに本稿を草し終りたる後、恩師三浦教授の指導を得て京大國史研究室に藏せらるゝ、上林文書を見ることを得、更らに拙稿を改訂することを得たり、附記して謝意を表す。(昭和二年八月)

百姓一揆の地方的分布に就て

經濟學士 黒 正 巖

從來の用語例に従へば、百姓一揆なるものは一種の暴動であつて、農民が團體を組み積極的暴力

によつて自己の利益を主張し、その生活を擁護せんとする破壊的示威運動と解せられ、従て百姓一

揆といへば、即ち竹槍席旗で焼打掠奪がつきものとせられて居る。故に之には種々の範疇に屬するものが包含せられ、その運動の原因又は對象に就きては何等本質的の區別を考へて居ない。隣村との水喧嘩も町人征伐の如きもそれが暴力的示威運動である限り矢張り百姓一揆とせられて居るようである。然るに私の「百姓一揆」と稱するものは從來

の用語例と著しく異なるのであつて必しも積極的運動とは限らない。苟しくも武士階級が身分的支配權を把持する封建社會に於てのみ發生しうる所の支配關係に基く農民の團體的反抗運動であるならば、凡べて之を百姓一揆とする。當時の言葉を以てせば「徒黨」の義である。かの強訴、暴動、逃散といふが如きは、徒黨の目的實現の手段方法にすぎない。故に本文に於て取扱ふ百姓一揆の中には、強訴は勿論、農民が陰密に衆議し、その代表者をして越訴せしむるが如き積極的反抗運動、

及び支配階級に對して直接に抵抗する事なく、自ら逃亡して支配者の壓迫を脱却せんとする逃散の如き、或は自己の支配者には直接反抗せずして他領に逃れてその地の領主に愁訴するが如き消極的運動も含まれて居るわけである。

私は百姓一揆を右の如く解するが故に、その件數は從來百姓一揆として數へられたるものに比して著しく増加する事が出來た。今日迄に蒐集し得たる材料は約四百二十四件の多きに達して居る。之等の材料は種々の觀點より研究せらるべきであるが、先づ第一にはその原因による分類である。百姓一揆の原因を分類する事によつて、徳川時代の農民階級が武士階級の爲めに如何なる點を壓迫せられて居たか、又如何なる事柄に最大の關心を有して居たかを闡明せらるゝと同時に、又之を時間的地理的に考察すれば、時代により又地方によつて農民の感ずる關心の變化する事を明かにし、

應て又農民階級の生産力に依存せる封建社會の變質過程を視ふの一助となるであらう。第二は運動方法の研究である。即ち時代、地方によつて運動方法が夫々異なる。例へばある地方に於ては廣い地域に亙る大規模の百姓一揆が起り、然かも積極的

發生せる事實があつたとすれば、大抵その後又は前に百姓一揆の發生した事を見出すであらう。茲に於て百姓一揆の發生密度を地理的に示す事が出来るのである。今四百二十四件の百姓一揆を國別に分類すれば次の如くである。

暴力によるに反し、或る地方に於ては小地域の者が消極的抵抗をなすといふが如き之れである。この外百姓一揆發生の季節的研究、百姓一揆の傳播性及び持續性の研究、百姓一揆鎮壓に關する研究の如きも亦重要である。而して百姓一揆の特性として最も注目すべきものは百姓一揆の頻發性と反覆性とである。前者は時間的に連續して百姓一揆の起るといふ性質にして、一定時期に於てある地方に一揆が發生したとすれば、同時に又他の地方に於ても亦發生するの傾向を有する事である。後者は同一の地方に於て反覆して百姓一揆の發生せんとする性質にして、ある地方に一度百姓一揆の

一回のみ百姓一揆の發生したるもの六箇國・山城(?)
相摸、筑後、淡路、備前(?)、尾張(?)。二回百姓一揆の反覆せるもの八箇國・日向、豊後、周防、因幡、若狹、遠江、下野、下總。三回百姓一揆の反覆せるもの十箇國・豊前、石見、丹波、丹後、攝津、伊勢、甲斐、武藏、安房、磐城。四回反覆せるもの四箇國・松前(之は漁師の反抗運動である)。大和、駿河、肥前。五回反覆せるもの一箇國・陸前。六回反覆せるもの二箇國・陸中、佐渡。七回反覆せるもの一箇國・出雲。八回三箇國・土佐、紀伊、上野、羽前。九回一箇國・伯耆。十回三箇國・讃岐、播磨、三河。十一回五箇國・肥後、備後、阿波、近江、陸奥。十二回三箇國・飛騨、美濃、越中。十三回二箇國・備中、美作。十四回一箇

國・越後。十五回一箇國・羽後。十六回二箇國・但馬・信濃。十七回二箇國・岩代、越前。四十九回一箇國・伊豫。一揆發生の事例の明かならざるもの十七箇國・薩摩、大隅、筑前、長門、安藝、河内、和泉、伊賀、志摩、伊豆、上總、常陸、加賀、能登、隱岐、壹岐、對馬。

以上の分布密度は、徳川時代の凡べての百姓一揆の事例を網羅する材料によつて現はしたものではなく、地方により調査の精粗あるため、之を確定的のものといふ事は出来ないのであるが、併し大體の傾向にはさして變化を生じないと思ふ。又當時の百姓一揆の地理的分布を覗ふ爲めには、國別にするよりも寧ろ藩別又は領地別にするを適當とするも、ある地方は小領地の入り組めるものがあるから、取扱の便宜上國別にした。尤も國別にする事も亦必しも無意味ではなく、小藩に分裂せる事、又は小領地の入組める事が應て百姓一揆の

反覆性に如何なる影響を及ぼすかを考ふる上に多少の参考ともなりうるであらう。

右に掲げたる所によつて見るに、只一回限り百姓一揆が發生したるに止り、二度以上反覆しなかつた例は僅かに六箇國にして、百姓一揆の發生せし國數全體の約一割にすぎない。三回反覆せる國は十箇國であるが、之とても全體の二割に達しない。四百二十四回中その大多數は一定の地域に於て頻繁に反覆して發生したものである。而して百姓一揆が何故に同一地域に於て反覆して發生するの傾向あるかを明かにせんとすれば、地方々々の社會素質なるものを研究するの必要がある。各地方は夫々一定の社會素質を有し、社會的事件に對して各感受性を異にするものである。故に同一の動因が加はるも、ある地方に對しては何等社會的事件の發生を見ないのに、ある地方に於てはその同一動因又はそれよりも微弱なる類似動因によつても

直ちに社會事件の發生を見るが如きことがある。而して社會素質なるものは自然的、社會的、經濟的、文化的諸條件の組み合せによつて決定せられ、然かもその有機的組み合せによるものであるから、一定の事件に對して機械的函數的に説明する事は出來ぬ。例へば兩國に同一の回數の百姓一揆があつたにしても、その兩國が全く同一の社會素質を有することは限らぬ。更にその最後の動因をも考慮しなければならぬ。併し大體の推論としては百姓一揆の頻繁に反覆せる地方は夫々類似せる社會素質を有し、類似の百姓一揆の動因を胚胎して居る事を主張しうるのである。故に日本全國を大別して百姓一揆の分布密度を見るならば、ある地方のみが特に著しく分布密度懸隔のあるが如き場合は少い。今舊來の地方大別法たる道別にして、各國の分布密度及び各道の平均密度を示せば次の如くである。

第一南海道、六箇國、一揆回數八十七、平均密度十四回五・紀伊八、阿波一一、淡路一、土佐八、伊豫四九、讃岐一〇。第二東山道十三箇國、回數百二十六、平均密度九回七・近江一一、美濃一二、飛騨一二、信濃一六、上野八、下野二、岩代一七、磐城三、羽前八、羽後一五、陸奥一一、陸中六、陸前五。第三北陸道七箇國、回數五十一、平均密度七回三・若狹二、越前一七、加賀〇、能登〇、越中一二、越後一四、佐渡六。第四山陽道八箇國、回數五十、平均密度六回二・長門〇、周防二、安藝〇。第五山陰道八箇國、回數四十三、平均密度五回四・石見三、出雲七、伯耆九、因幡二、但馬一六、丹波三、丹後三、隱岐〇。第六東海道十五箇國、回數三十二、平均密度二四一三・伊賀〇、伊勢三志摩〇、尾張一、三河一〇、遠江二、駿河四、甲斐三伊豆〇、相摸一、武藏三、安房三、上總〇、下總二、常陸〇。第七西海道十一箇國、回數二十三、平均密度二回一・筑前〇、筑後一、豊前三、豊後二、肥前四、肥後一一、日向二、大隅〇、薩摩〇、壹岐〇、對馬〇。

第八畿内五箇國、回数八、平均密度一回六・山城一、大和四、和泉〇、攝津三、河内〇。

先づ第一に目立つのは南海道六箇國である。殊に伊豫國は將に五十回に達せんとする最高レコードを有し、その他の諸國も亦相當に高き密度を示して居つて、四國の平均は十四回五の高度である。又この地方中四國に於ては大規模の暴動的百姓一揆が少くて、小規模の數箇村又は一箇村のみの騒動の數が多く、且つその抵抗方法にして逃散といへる消極的形態をとるものが非常に多い。故に私はこの消極的抵抗を以て假りに四國型と名けるのである。何故にかくの如き形態を生ずるに至つたかにつきては、種々の説明を加へる事が出来るであらうが、私は他の機會に於て已に概説したことがあるから、茲には敢へてこれを繰返すまい。次に顯著なる分布密度を示すものは東山道である。東山道十三箇國中下野と磐城とが比較的

低き密度を有するのみで、他は何れも極めて高き密度を示し、百姓一揆四百二十四件中、東山道のみで實に百二十六回、一國の平均九回七に達して居る。以下順次北陸道は七箇國五十一回、密度七回三、山陽道八箇國五十回、密度六回二、山陰道八箇國四十三回、密度五回四、西海道九箇國（壹岐對島を除く）二十三回、密度二回六、東海道十五箇國三十二回密度二回一、畿内五箇國八回、一回六の分布密度である。而て各道について見るにその國々の間に發生回数に極端なる差異なく、殆ど大同小異の状態を示して居る。かくして各道は夫々獨特の類型タイプを有するのであつて、之を圖表に表はせば一層この類型を明確に理解する事が出来るであらう。各地方の百姓一揆に對する社會素質及び動因は必しも自然的要素のみに限られない、殊にその動因は、封建社會特有の政治的、社會的原因に基くものが多いが、然かも自然的環境と社

會的環境とが如何に密接の關係を有するかは、自然的區分に基く從來の道別區分に於て、封建社會の下に當然に生起すべき百姓一揆、從て又封建的統制の地方的特色が現はれて居るものといふべく、今日多くの人々がかの海道別の意義の那邊に存するかを疑ひ、今日ではこの區分法は全く顧みられなくなつて居るが、併し徳川時代に於ては相當重要な意義があつたいふ事が出來よう。

以上は極めて大まかに、徳川時代の百姓一揆の地理的分布を記述したるに止り、その何故にかくの如き分布を爲すに至つたかといふ原因につきては何等論及する所がなかつた。之には百姓一揆の原因を細かに分類する事、及び各地方の社會素質の究明をなす事を必要とし、從て概括的理論よりも寧ろ各國夫々につきて精細なる研究を前提とするものである。殊に本研究の資料となれる百姓一揆の事例は、各地方の凡べてを大小洩さず蒐集し

たものでもないから、かゝる原因論的説明は當分さし控へるべきであると思ふ。只併し之だけの材料によつて見るも、徳川時代に於て各地方が夫々如何なる社會的自然的環境の下にあつたかを視ふの根據となるものではあるまいか。百姓一揆の全く發生せざりし地方又は回數の極めて少き地方は多く大國であり、武士の統制も比較的整頓し、農民の經濟事情の良好なるものが多かつたようである。私は今後尙は多くの材料を蒐集する事によつて、この種の研究を補完し、從來専ら支配者階級たる武士の文化のみを主要對象とせる研究方法に對して、封建的支配關係より必然に發生すべき階級闘争、否武士階級と農民階級との文化水進化的過程に於て發生する一の社會現象を把握する事によつて、社會の變遷發達を考へ度いと思ふ。

(本文は私が滿鮮旅行出發の前日に草したるものであつて、推敲の至らざるもの少ししもない。讀者之を諒せられよ。)